

A 語句の意味と読み

- (1) 「行く（来）」の謙譲語。参上する・お訪ねする、の意。／目上の俊成のもとへ行く動作を、へりくだって言っている
- (2) ぎょえい（本文のルビ「ぎょえい」を現代仮名遣いに直したもの）／（あなたが）お詠みになった歌。相手の歌を敬っている語。／「御」がついているので、俊成の歌を敬う言い方
- (3) 広く行き渡っている。すみずみまで及んでいる。（「世にあまねく」の形で「広く世間に」の意になる）／「世にあまねく」で「広く世間に」
- (4) 内々に。こっそりと。人に知られないように。／表立って言うのではない、という含み
- (5) 残念だ。もの足りない。心残りだ。／現代語の「くやしい」より「残念だ」に近い
- (6) さらりと言ったのける。言い切らずに軽く述べる。／「流す」は、力を入れずさっと通すこと
- (7) 心にくし＝奥ゆかしい。深みがあって上品だ／優なり＝優美だ。上品で趣がある。／「心にくし」は現代語の「憎らしい」ではない

B 文法

- (8) 「思ふ」の尊敬語。お思いになる、の意。／俊恵が、目上である俊成の動作を高めている
- (9) 過去の助動詞「き」の已然形。已然形＋「ば」で、順接の確定条件（～たところ・～ので）を表す。／未然形＋「ば」（もし～ならば）との区別が頻出
- (10) 伝聞・推定の助動詞。終止形「鳴く」に接続し、鳴き声という聴覚が判断の根拠になっているから。断定の「なり」は体言・連体形に接続する。／教科書により「推定」「伝聞推定」と呼び方が異なる。お使いの教科書の呼び方に合わせる

(11) 八行下二段活用。四段の「給ふ」が尊敬（～なさる）であるのに対し、下二段の「給ふ」は自分の動作にそえて「…ております」とへりくだる補助動詞である。／敬語の種類は「謙譲」とする教科書と「丁寧」とする教科書がある。お使いの教科書の説明に合わせる

(12) 上に係助詞「なむ」があり、その結びになっているから（係り結び）。／「これをなむ…給ふる」で一組

(13) 上の係助詞「こそ」を受けた結びだから（こそ→已然形）。／「思はせたるこそ…侍れ」で一組

C 主語・指す内容・敬意の方向

- (14) 動作主＝俊恵。敬意の対象＝五条三位入道（藤原俊成）。／謙譲語は、動作の受け手（行き先）を高める
- (15) 主語＝俊恵。話し手である俊恵から、俊成への敬意。／「聞こゆ」＝「言ふ」の謙譲語＝申し上げる
- (16) 五条三位入道（藤原俊成）。／直前の俊恵の問いかけに答えている部分
- (17) 第三句／「身にしてみて」。／五・七・五・七・七の三句目

D 口語訳

- (18) この歌を、自分にとっては代表歌（おもて歌）と思っております。／「給ふる」は下二段＝自分をへりくだる言い方。係助詞「なむ」の結びで連体形
- (19) さあ、よそではそうに評しているのでしょうか。／「いさ」＝さあ（どうだか）／「や…らん（らむ）」＝現在推量の疑問
- (20) 情景をさらりと言ひ流して（詠み流して）。／「言ひ流す」＝深く言い立てず、さらりと言う
- (21) まったく情趣が浅くなってしまった。／「むげに」＝まったく・すっかり／「こと浅し」＝趣が浅い

E 内容・記述

(22) 面影の歌は深草の里の歌に及ばず、比べものにならない。(二十六字) / 「なほみづからは」＝それでも自分としては、の意

(23) 弟子の鴨長明に語った。俊成の面前で言ったのではなく、あとでこっそり語ったものである。 / 俊成に面と向かって言った批判ではない、という点がよく問われる

(24) 感動を言わず、山の雪と麓の時雨の情景だけを並べ、寂しさを言外に感じさせている。(三十九字) / 俊成歌の「身にしみて」にあたる直接表現がないことに注目

(25) 歌の眼目である感動を「身にしみて」と直接言い表した点。(二十七字) / 「歌の詮とすべきふしを、さはと言ひあらはしたれば」が根拠

F 文学史

(26) 鴨長明 / 『方丈記』 / 本文を聞き書きしているのもこの人物

(27) 歌論書(和歌についての評論や逸話を集めた書物) / 鎌倉時代のはじめ / 歌の善し悪しを論じる本

(28) 藤原俊成 / 『千載和歌集』 / 子は『新古今和歌集』の撰者の一人、藤原定家

【現代語訳(全文)】

俊恵が言うことには、「五条三位入道(藤原俊成)のもとに参上した折に、『あなたがお詠みになった歌の中では、どれがすぐれているとお思いですか。世間の人はいろいろに評しておりますが、それは取り上げるつもりはございません。あなたご自身のお考えを、まさしくうかがいたい』と申し上げたところ、

(俊成は)『夕方になると、野辺を吹く秋風が身にしみて、うずらが鳴いているのが聞こえる、この深草の里では。――この歌を、自分にとっては代表歌(おもて歌)と思っております』とおっしゃったが、

俊恵がさらに言うことには、『世間で広く人が申しておりますのは、「面影に桜の花の姿を先に立てて思いうかべながら、いくつもの峰を越えて来たことだ、その峰の白雲よ」――この歌をすぐれていると申しておりますのは、いかがでしょうか』と(俊成に)申し上げた。(すると俊成は)『さあ、よそではそのように評しているのでしょうか。私は存じません。やはり自分としては、先の(深草の里の)歌とは言い比べることができません』とおっしゃった。』

(俊恵が)これについて、こっそりと(私＝長明に)申したことには、「あの歌は、『身にしみて』という第三句が、たいそう残念に思われるのです。これほどまでにすぐれた歌になりますと、情景をさらりと詠み流して、ただそれとなく『身にしみたのだらうなあ』と読み手に思わせてこそ、奥ゆかしくも優美にも感じられるのです。たいへんうまく言い続けてきて、歌の眼目とすべき大事なところを、『それはこうだ』とはっきり言い表してしまったので、まったく情趣が浅くなってしまったのです」と(言った)。

そして、俊恵自身の自慢の歌(おもて歌)は、『吉野の山が一面に曇って雪が降ると、その麓の里では時雨がしきりに降っていることだ。――この歌を、あの(俊成のおもて歌のような)代表歌にしようと思っております。もし後の世に、(私の代表歌について)はっきりしないと言う人がいたら、「(俊恵は)こう言っていた」と語ってください』と、(私＝長明に)語ったのである。